

■ 編集だより

編集後記

国と国との境界線は、古来絶えることのない争いの種だが、ここ最近わが国も直視せざるをえないことが増えてきている。国際的にタフな付き合い方が一層求められていく一方で、本邦から海外に向かう留学生の数が年々減少してきていることがしばしば報道され、諸外国に対して内向的な意識を持つ若者が増えつつあるのではないかと危惧される。

私は数年前に、自分の日ごろの不勉強もわきまえず、いま思えば能天気アメリカ西海岸に研究留学した。そこで学んだことの一つは、「母国を離れる」意味の重要性であった。異国の地で、私は「アジア人」であった。そういう括りで見られることが少なくなかったし、私自身も、日本人か、韓国人か、中国人か、インド人かなどは、そう大した問題でないと思うようになっていった。アジア人としての親近感と助け合いがそこにはあった。街を歩けば、チャイナタウンでは中国と台湾の国旗が隣り合って掲げられていた。TVでみる北京オリンピックの野球で、日本は敗退、韓国が金メダル。それでも嬉しかった。日本では知りえない不思議な感覚であった。異国の地ではみんな結構わだかまりなく仲良くやれるのに、母国にいるときは何故いがみ合う気持ちが生じてしまうのだろうか。

境界線の問題は、何も国レベルのことばかりではない。東京湾の新たな埋め立て地の帰属をめぐる、隣接する区がお互いに権利を主張し合って、いまだその土地は番地をつけられずにいる。セクショナリズムはどこにでもあって、身近へと下ろしはじめればきりが無い。

自らを如何に大きな枠の中に帰属させることができるかが重要だろう。自分が拠りどころとしている境界線を越えて、外からそれがどの程度のものであるか見つめなおす機会が貴重である。私はアジア人という意識止まりであったが、ソユーズの打ち上げと国際宇宙ステーションの映像などを見ていると、宇宙飛行士たちは「地球人」という感覚を持っているに違いないと思う。

私がこういう気持ちになれたのも、留学先の研究室で机を並べた、ある韓国人留学生のおかげであった。どうにかなるさと、ろくな準備もなかった私の面倒をととても親切にみてくれ、人の間に垣根のないことを身をもって教えてくれた。留学途中で病に倒れ、帰国の後に志なかばで逝った彼のことを、夏の日差しが照りつけ始める命日の頃になると改めて思いかえす。そして、つまらない縄張り意識に陥らず、優しく開かれた心を持てているかを自問するのである。

根本隆洋